

牧会の達人 鵜飼勇先生¹

——鵜飼猛・勇両牧師・父子の77年

長山信夫

鵜飼勇先生が昨年5月19日に主の御許に召されて1年を迎えようとしている。先生は教会員の葬儀の時必ず植村正久訳によるセラ・ゲラルデナ・ストックの詩「天に一人を増しぬ」を朗読し、遺された者への慰めの言葉としておられた。今鵜飼先生を知る多くの人々がその1節「愛する顔いつもの席に見えぬぞ悲しき」を折に触れ味わうこととなっているのではなからうか。先生の伝えたかったのは「天に一人を増しぬ」という祝福された事実であることを承知しているのだけれども。

鵜飼先生の「牧会の達人」としての評価は早くから定まっていたのではなからうか。先生の葬儀で、説教者近藤勝彦東京神学大学教授は、先生を「大樹」と表現し、その木陰に憩う恩恵に与った者は決して少なくないはずだと語り出された。牧会的配慮の恵みに与った者は、銀座教会員はもとより、牧師たちの間にも多かったのである。伝道者としての生涯は、エール大学留学

前後の2年間をはさんで日本基督教団鎌倉教会の2年と銀座教会の42年である。全期間複数教会であった。主日礼拝をはじめ、結婚式や、葬儀に至るまで、駆け出しの伝道者も聖職者として遇されて聖壇の御用に共に当たるやり方は、どこの教会でも行われているわけではない。銀座教会に仕える者は、いつの間にか、厳粛な礼拝での聖職者の立ち居振る舞いを身に着け、諸教会に遣わされてその礼拝を格調高いものとして喜ばれているのである。

エール大学に留学された折カウンセリングの講座を履修、2ヶ月間、町に出て人々の話にひたすら耳を傾け続けるという訓練を受けられたという。説教集『神偕に在せば』にこうある。「神の民として、日曜日の礼拝に加わることも、週日、職場や家庭においてそれぞれの勤めを果たすことも、すべてが福音に関係している出来事であって、日常生活の隅々まで福音の真理が浸透し『福音不在』ということはありません。」単にカウンセラーとして聞くだけでなく、その人の言葉に浸透している福音の真理に聞く真摯さが、先生をして「牧会の達人」たらしめたのだと改めて教えられるのである。

鵜飼勇先生の献身の経緯は、父親である牧師鵜飼猛先生の口述を筆記した中から数編を出版した『回顧70年——伝道牧会の光栄と歓喜』のあとがきに先生ご自身が記されている²。鵜飼猛牧師を心から尊敬し、畏怖をすら抱い

² 主イエスとの出会い 鵜飼 勇

私のまだ幼い頃の出来事である。牧師であった父は、毎週金曜日の朝は食事をしないことになっていた。「金曜日の断食」これは父が信仰生活六十余年に一貫して選びとった厳しい道の一つであった。

ある金曜日の朝早く、私は何のためだか覚えていないが、鎌倉教会の牧師館の薄暗い応接間の扉を開けて思わずそこに立ちすくんでしまった。そして大急ぎでソツと扉を閉めて茶の間に走って行った。私は見てはならないものを見てしまったと思って、誰にも話すことができないで、そのままその時のことを胸に秘めておいた。

その出来事というのは、薄暗い部屋の真中にある椅子の前に膝まづいて祈っている父の姿を見たということなのである。天を仰いで、手を合せ、人に語るように神に語りかけている祈りの姿！眼は半分閉じているが、白眼がくっきりと見えている。この光景は幼い私の心にくっきりと焼きつけられてしまった。

丁度、グッセマネの園に「父よ、みこころならば……私の思いではなく……みこころがなるようにしてください」と、血のしたたりのような汗を流してお祈りになった主イエスのみ姿を思い出させる厳粛な一瞬であった。金曜日毎に父が断食していることが、この祈りに連っているということは、だいぶ後になって理解できるようになっ

¹ 1998年9月21日、「Reading in Wesley」と題して、ウェスレー研究に関心を寄せる諸氏が、銀座教会に集まった。集まった研究者・牧師たちは翌年日本ウェスレー・メソジスト学会を旗揚げすることになった。当初から、学会顧問として、研究会の開催教会として、鵜飼氏は学会を支えてくださり、入院時期を除いて、鵜飼氏の姿を見ない研究会はなかった。ウェスレーの信仰に生きることをめざしておられた氏を天にお送りすることは、学会として痛手であるが、そのお姿は学会員の心に刻まれている。鵜飼氏と共に、学会設立当初から研究会を支えてくださった長山氏にご寄稿をいただいたことを感謝する。(記・編集委員)

ていたことがわかる。猛牧師は 21 歳の時勉学のため渡米、サンフランシスコ日本人福音会に美山貫一牧師を訪ね、同館に起居、翌年受洗、スーパー宣教師休暇明けの日本への歓送会の折、受洗以来抱いていた伝道の召命の確信を得るに及び、美山牧師の許で伝道に従事、安藤太郎氏を始めハワイ総領事館員全員の入信というリヴァイバルに遭遇、26 歳でシンプソン大学に進み 4 年後に卒業メソジスト教会教職として、執事・長老の按手を受け、翌年帰朝、青山、銀座、鎌倉、安藤記念、西片町のメソジスト諸教会、また教派協力による日本日曜学校協会の幹事などを務められた。銀座教会には実に 3 度赴任され、通算 25 年に及ぶ。鵜飼勇先生を語るとき、猛先生の存在を重要視するのは、靈性においても教会形成においてもメソジストの本流を歩まれた方であり、勇先生の 42 年間をあわせると今年で 117 年目を迎える銀座教会の

た。

私が牧師、伝道者として召されて立ち上った背後に、この父の祈りがあり、この厳肅な一瞬が、私のすべての生活を支配していると云っても過言ではない。あのことがあってから二十数年後、戦争から復員した私は病をえて暫く家に静養し、引退して悠々自適する父と鎌倉の仮寓に共々生活する機会を得た。その間、兄たちの奨めで父の自伝の口述を筆記することになった時、主が松江の一武士の息子を選び出し、伝道者としてお立てになり、五十余年の牧会を今日まで導いて下さったその歴史をまざまざと示され、妙なる摂理とその主を信じぬいた父の信仰と祈りによって、私の存在は根底から揺がされたのである。密室にただ一人、主の臨在を信じて祈り続けた祈りと、その祈りを聞き給う主/そしてその祈りに支えられて今ここに生かされている私/病中、私は祈りの時に、主の臨在と、祈りの応答の信仰を養われた。あの出来事の意味するものを聖言に学びながら味わっている間に、実に不徹底な、生まれぬい信仰生活をしてきたことを鋭く示され、深く恥じ、懺悔の祈りに導かれた。かくして、全く新しい世界が開かれて来たのである。私は健康を回復すると共に、これまで勤めていた三菱信託銀行を辞して神学校に入学することになった。

見てはならないものを見たというある出来事（聖なるものをかいまみた）は徹底した祈りの力となって成長した私の魂をとらえ、私をその宣教に遣すまでに大きな働きをした。

私は父の祈りの姿として刻みつけられた出来事を媒介として、主に出会い、また、祈りによって主と結ばれていると信じている。祈らないことは恐ろしい、祈れないことは更に恐ろしい、まして祈を麻痺させるこの世につける思いは、真に人を腐敗させる。主の臨在を信じて、真に祈ることに徹底していくことが現在の私の課題である。

（1964 年 銀座の鐘）

77 年を鵜飼猛先生、勇先生が指導して来られたからである。勇先生は、父親であるからというよりも、もっとも身近に存在した信仰の先達者として猛先生を尊敬し、その教会形成の方針を受け継ぎ、発展させて日本基督教団成立後の銀座教会を牧会して来られたのである。今日、ウエスレーの靈性を受け継ぐ教会は決して少なくない。しかし、その制度をも受け継ぎ、メソジスト教会としての形成を積み重ねている群れはどこにあるのだろうか。この点、個教会としての限界はあるが、神から派遣された者としての教職に対する尊敬、信徒の積極的参与による教会形成、組長・班長として教会生活から離れてしまっている組員の牧会にまであたる組会制度、信徒説教者の働きなど、銀座教会が受け継いでいるものの意義は大きく、日本の諸教会に対する責任は小さくないと考えているのである。³

鵜飼勇先生は、1994 年 5 月、米国シンプソン大学より名誉神学博士号を授与された。猛先生の同校卒業より百年目にあたる年である。鵜飼先生父子の信仰的つながりを米国の人々が理解していたことになる。勇先生の葬儀の際の遺影は、そのときのドクターガウンを身につけ、生涯最後の祝福となった 2005 年クリスマスの礼拝を終えた直後に撮影されたものである。勇先生自身が遺影を選ばれていたことの意味は深い。

晩年、誰もが経験する老いと病、主にゆだねて歩む先生の信仰は変わることなく、わたしたちはその力強さに圧倒された。流動食となってからも、礼拝に、

³ 「東洋におけるプロテスタント・キリスト教の伝道の特徴は、……根本においては宗教改革者の信仰上の立場と改革の原理とに基づくことではあるが、さらにそれがドイツの敬虔主義者によって個人的内面的に深められもしくは体験された魂の救いの信仰が、第 18 世紀のイギリスのメソジスト運動によって新時代の市民生活における実践として努力され、やがて人道主義的精神の徹底の結果、この内的な救いの信仰の体験と厳肅な生活聖化の実践とを、世界のあらゆる人類に伝え、教えて信じ生活せしめなければ止まないという、熾んな聖なる要請となって表現したのである。」（中略）「そしてこの源流を、……その後神学的あるいは教会主義的思考を受容展開することによって補足修正を加え、現代の要求に適応させることは意味があるであろうが、そのために基本的な線に歪みを与えることはプロテスタントとして慎重でなければならない。」（石原謙『日本キリスト教史』（1967 年）序説）

午餐会に積極的に参加され、励ましてくださった。最後の病との闘いとなった長い入院生活、神からいただいた命のときを大切に、平静であられた先生について、証ししなければならないという使命感のようなものを感じている。気管切開を決断し、声を発することができなくなった先生をお訪ねするのはつらいことであった。見舞う者たちの来訪を喜び、指で「2, 3」と示し、詩編23編を読み、祈るようにと求められた。それを理解し、その通りにすると、先生は大変な満足を示された。訪問した者たちにとっては何よりの喜びであったことは言うまでもありません。

「最も良いことは、主が共にいてくださることだ」。ジョン・ウエスレーの臨終の言葉と共に最期の場面を伝える線描画は大きな額に入れられ(書は栄子夫人)、20年前に鶉飼先生の手によって銀座教会の牧師室に飾られている。先生はそれが真実であることを身をもって示してくださったのである。

(日本基督教団・銀座教会牧師)